〔仏教の美術展によせて〕

飛鳥時代止利式仏像の紐の意味とその源流

一昨年の本紙No. 81では「仏像の胸前紐結びの形式―止利様式仏像の源流の手がかり―」と題して、わが国法隆寺金堂釈迦如来像（図1）に代表される止利式如来像の胸前紐結びの種々を紹介し、中国北魏の仏像とも比較して、さらに、この紐の意味を考える必要を述べました。

この問題は、同年11月22日(日)の美術講座の中でも触れて、仏像の胸前の紐は、これまで一般的に説明されてきたような“裙（スカート）の紐”ではなくて仏像が下着として用いている僧祇支を胸前で押さえるための紐であると述べ、さらに、これと関連して、仏像の大衣の裾下に見える二本の紐に対する疑問を提示いたしました。

続いて、昨年７月31日(日)の美術講座において、「中国北魏の仏像について」としまして、以上の二種の紐(胸前と大衣裾下)の原型を北魏仏の中に探る試みをいたし、麦積山の石窟仏にたどりつき、また裾下の紐については、胸前の紐とは別で、裙の胴部についている紐を垂下させているのであると結論いたしました。

わが国の仏像彫刻史の冒頭に位置づけられる止利様式の仏像についての一見何げない問題の中に、重要な問題が隠されているのではないかと思われ、永年わが国の上代の仏像彫刻に興味を抱き続けてきました私は、暫くこのテーマに取組んでみようと思うのです。

そこで、今日は、止利式の紐の原型を麦積山の仏像に求めた経緯と、以上の二種の紐の意味を結論づけた経緯とを本紙上にまとめ、次の段階に進む準備といたしたく思います。

１．紐の意味についての既往の説

中国北魏の仏像の胸前紐については、長広敏雄氏(『大同石仏芸術論』)・小川晴暘氏(『大同雲岡の石窟』)が、下袈裟(僧祇支)の紐と解釈され、これを受けて、小杉一雄氏(『中国仏教美術史の研究』)が、飛鳥仏の胸前紐について、僧祇支を結ぶ紐であると述べられ、裙の紐は腰の当りに結ぶので、その紐を胸元から見せるのは無理であると述べられました。

ただ、小杉氏が、大衣裾下の紐について、この胸前の僧祇支の紐が胸元で大衣の中に入ってその先端が長く裾下に見えているのである(法隆寺釈迦像の例)と述べていられる点はいさゝか疑問があり、後に私は異る見解を述べます。

胸前の紐については、以上の見解が公表された後も、余り注意が払われず、止利派の胸の紐については、依然として、「裙の紐」と説明されるか、単に「紐帯をしめている」として何の紐かを明示しない場合が多いのです。

２．僧祇支を結ぶ紐の例

仏衣の僧祇支については、井筒雅風『法衣史』や『望月仏教語辞典』に“僧祇支に紐がつく”とあり、逸見梅栄『仏像の形式』に“斜にあらわされた祇支上に細い紐帯をしめるもの”として、龍門賓陽洞中洞本尊（６世紀初期）（図２）を例示されています。

仏像彫刻や仏画の中に、僧祇支の上に紐を結んでいる例としては、法隆寺金堂壁画の一号(図３)・九号・十号壁の各如来像(白鳳時代)、山形薬師堂の如来倚像(白鳳時代)、天竜山石窟第五洞の如来倚像（唐時代700～720年頃、東京国立博物館蔵)、五島極楽寺如来立像(統一新羅時代８世紀中頃)などがあり、ここではこの胸前の紐が裙の紐ではなく、僧祇支を結ぶ紐であることが明らかです。

３．裙を結ぶ紐の例

先述の『法衣史』にインドでは行われなかったが、中国において、裙の全体に襞をつけた結果、必然的にその上部に紐をつけたと説明しています。

実例としては、如来像にはそれと分かるものが無いのですが、菩薩像では、上半身は天衣をまとうのみで裸形として、下半身に裙をまとって、裙を紐で結ぶという例がガンダーラ以来わが国の菩薩像にまで見られます。『法衣史』にインドでは行われなかったとありますが、菩薩像においてはインドの初期の菩薩像に既に見られます。

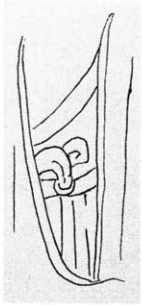

図7.麦積山第16号窟正壁如来坐像（胸前）

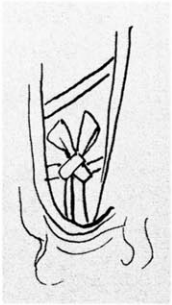

図8.麦積山第133号窟第一龕如来坐像（胸前）

４．止利式仏像の紐の例

それでは、上記の胸前紐の例と、裙の紐の例は、止利式仏像の場合と同じ意味であるのか無いのかということです。

形の上ではどうでしょうか？先ず、法隆寺金堂釈迦如来像では胸前には、結び紐の先端のみを花形のように表わしています。私はこれを二本の紐と判断します。この形式が第一形式。次に、第二形式として、紐を横に渡している例(図４)が挙げられ、第三形式として、第一・第二形式の折衷とも言えるもの(図５)があります。

大衣裾下に見える紐については

図1.法隆寺金堂釈迦如来像

図2.龍門賓陽洞中洞本尊

図3.法隆寺金堂　一号壁如来坐像（胸前）

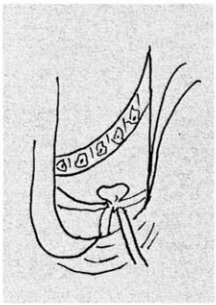

図4.戊子年銘如来坐像（胸前）

図5.個人蔵如来坐像

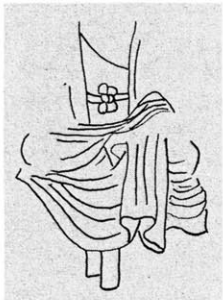

図6.四十八体仏如来坐像（胸前）

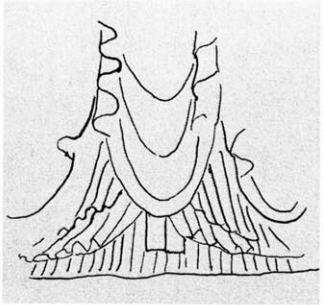

図9. 麦積山第133号窟第三龕如来坐像（裳裾）

図10. 永明元年（483）銘無量寿像

図11. 顕慶5年（660）銘石造阿弥陀像（胸前）

法隆寺金堂像の他、四十八体仏中（図6）や、個人蔵（図5）などに見られます。

以上はいずれも、止利式及びその流れを汲む仏像です。

5．中国の例

いよいよ止利式の源流を探る段階です。中国の第一形式として、胸前の紐の形が花形でない例があり、特に、その紐の両端が長く垂下して胸の大衣の中にもぐっている例も多く見受けます。これは先の止利式の第二形式と通ずると思われますが、止利式では、二本の紐の先がしばしば表わされず、結び目だけで終っているものがあります。第二形式としていよいよ紐の先端を上に挙げて蝶結びか花形に表わしている例ですが、大和文華館の北魏時代釈迦如来立像もこれに入ります。雲岡第六洞の如来像や成都万仏寺址出土の如来像などもこの部類ですが、何と言っても驚ろくべき遺例は、この蝶結びが大きくて、紐の両先が大衣の中に入っている例でありまして、麦積山第16号窟（図7）、133号窟（図8）、138号窟などに見られます。これは、第一形式とは異りますが、同様に僧祇支を結ぶ紐であり、それが装飾的で大仰な蝶結びで表わされ、その紐の両端が大衣の中にもぐっているわけです。即ち、法隆寺金堂如来像もこれと同様、垂下した両端は大衣の中に隠れて、花形の部分だけが見えていると考えられます。従って止利式のその他の形も皆、僧祇支を結ぶ紐であります。

次に、大衣裾下の紐の例としては北魏の麦積山石窟133号窟如来坐像（図9）や南斉の永明元年（483）銘無量寿像（図10）があり、止利式の紐の位置と同じです。

6．止利派の紐の意味と源流

そろそろ結論に入ります。以上の例から、また、さらに、北魏の鞏県石窟第一窟維摩詰像や、隋の炳霊寺第八窟菩薩立像、唐の山東省聊城地区博物館の顕慶5年（660）銘石造阿弥陀三尊像（図11）に、胸と裙の紐をはっきり別々に明示している例が見られる点からも、止利式の胸前と大衣裾下の紐は別のものだと理解できます。止利式の先の例にも、胸前と裙の紐をはっきり別のものとして表わした例がありました。

『法衣史』にも僧祇支は裙の上に重ねて着るとありますから、僧祇支を着ている場合に、裙の紐は隠れてしまい、胸前に出るということは考えられません。

また、わが国の後の仏像の例にも、例えば、白鳳時代の橘夫人厨子阿弥陀如来像や天平時代の般若寺薬師如来像では裾下の紐だけを表わし、胸前には紐を表わしていません。

以上の諸例から判断して、法隆寺金堂釈迦如来像の胸前に見える紐は僧祇支を結ぶ紐とし、大衣裾下に見える紐は裙の紐と解すべきと結論いたします。そして、その原型は麦積山石窟16号窟（図7）や133号窟（図8）（以上胸前）、同133号窟（裾下）（図9）辺りにありそうです。

季刊 美のたより No.88
平成元年8月24日
発行 大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.